慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	美しく歩く
Sub Title	
Author	森, 英恵(Mori, Hanae)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2006
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2006.) ,p.187- 214
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	冊子掲載の内容を一部修正したもの
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20060000-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

美しく歩く

ファッションデザイナー

森　英恵

一九五一年、新宿にスタジオ設立。

一九五〇年代から六〇年代後半にかけて日本映画全盛期に数多くの衣裳デザインを担当。一九六五年、ニューヨークで初の海外コレクションを発表、「East meets West」と絶賛を得る。一九七七年、パリにメゾンをオープン。パリ・オートクチュール組合に属する唯一の東洋人として、国際的なデザイン活動を展開した。

朝日賞、紫綬褒章、東京都文化賞、文化勲章、レジオン・ドヌール勲章オフィシエ、毎日ファッション大賞特別賞他。

東京女子大学卒業、島根県出身。

美しく歩く

みなさん、こんばんは。ファッションデザイナーの森英恵でございます。私は、五十年間、このファッションという仕事でがんばってまいりました。若いみなさんにお話をする機会をもてたことを本当にうれしく思っております。

今日の講演のタイトルは「美しく歩く」とつけました。日本の現総理が「美しい国、日本」とうたっています。この「美しい」という言葉はとてもきれいな言葉ですが、よくよく考えると「美しい」とはどういうことなのでしょう？　国も、街も、会社も、家族もみんな人間で構成されている。ですから、「一人ひとりが美しい」ということが基本なのかなと考えております。

ファッションというと、みなさんは「着ること」と思われるかもしれませんが、実は広い意味でこのファッションという言葉は使われております。つまりそれぞれのライフスタイルそのものだと言えるでしょう。

人間の基本的な行動は「歩く」ことですね。一九六一年に私は初めてニューヨークにまいりました。ニューヨークのフィフス・アベニューを歩いておりましたら、あまりにウィンドーが美しい。それに見とれながら歩いておりましたところ、おそらくバーグドルフ・グッドマンのウィンドーだったと思いますが、へんな東洋人がよちよちと歩いている姿が目に入ったのです。「まあ、恥ずかしい」と思って、よくよく見ると、なんとそれは自分自身でした。これではいけないと思いまして、それから歩くことについて私なりに神経を使うようにしておりました。

そんなときに、ニューヨークのモデル学校の学長さんにお会いする機会がありました。モデルになるためには美しく歩くことが基本です。「歩くことではどんなことが大事なのですか」とうかがったところ、「脚で歩くからダメなのよ」という返事が返ってきました。でも脚で歩きますよね。「じゃあ、いったいどこで歩くのでしょう?」と聞きましたら、「腰で歩くのよ」と言われました。「腰を横に振るのではなくて、ちゃんと前に進めなさい。腰がまっすぐに前を向いて歩けば、脚はついてくる。さらに腰が伸びて、姿勢がよくなる」と、アドバイスをいただきました。東京に帰ってきてから、さっそく私も鏡の前で実践してみました。脚で歩くと、確かに腰が後ろに残ってしまい、つい背中も丸くなってしまいます。歩くことは、つまりとても基本的なことで、大切なのではないかと思ったわけでございました。

映画の衣装デザイン

日本には洋服だけでなく和服もあります。和服と洋服の違いは大きく、私は長い西洋の歴史のなかで育ってきた洋服というものを自分の職業にしてきたわけですが、考えさせられることがずいぶんとございました。

私の父親は医者でした。お医者さんというのは不思議なもので、医者がいちばんいい職業と思っているらしいのですね。でも、お医者さんのところに来る人は頭が痛かったり、熱があったり、眠れないなど、いいことはひとつもないわけです。そういうことを私は見ておりまして、お医者さんになるのだけは絶対にいやだと思っておりました。私は五人兄弟ですが、私以外はみんな医者にさせられてしまい、兄嫁

までお医者さんにさせられてしまいました。私はとても抵抗しまして、大学では違う道を選んだのですが、そのときに父が言いましたのは「お医者さんになるのでなければ、いい家庭の主婦になれ」ということでした。これはしょうがないかと思って、大学を終えて結婚しました。

主人は猛烈社員でございまして、夜も仕事で遅くなります。そんななかで、私にとって主婦という仕事は少し退屈でした。十本の指がありましたら、全部は必要ない。五本ぐらいでできてしまう。そこで、片方で主婦をやりながら、もう片方で何か自分の好きなことをやりたいと思いました。私は子どものころからアーティストになることを願っていたのですが、片方の手で今からファインアートをやるのはちょっと手遅れかなと思いました。じゃあ、何をやるか。当時、街には自分の気に入った服がありませんでした。「自分の好きな服を自分で作れたらいいな。子どもが生まれたら、その子の服を作りたい。主人の背広を作るのは無理にしても、ウィークエンドに着る洒落たシャツぐらいできるといいな」という気持ちで、ドレスメーキングの学校に通い始めたわけです。

学校に来ているのはみんな若い人たちでした。花嫁学校のようなもので、みなさん、どんどん結婚してしまいます。私は結婚してから通い始めましたし、服がだんだんとかたちになってくるのがとてもおもしろくて、やめる人たちを横目で見ながらずっと通い続けていました。最初は自分の着る服を作るために始めたのですが、こういうことができるのなら、人のために服を作りたいなと思うようになったわけです。学校を卒業しましてから、新宿にいた友人がもっているビル、今のような立派なビルではありません、でもそのビルの二階なら貸してくれるという話があり、私はささやかなスタジオとブティックを開きました。それは「ひよしや」といいます。今日、この日吉の駅を降りて、その響きをとても懐か

しく思いながら歩いておりました。

新宿東口に武蔵野館という映画館があります。「ひよしや」はその向かい筋にありました。二階の窓を全部総ガラスにしまして、アメリカ製のマネキン人形を何体か置いて、自分のデザインした服を着せておりました。とにかく小さなスタジオですから、従業員も多くはありません。デザインして、服を作って、マネキン人形に着せると、すぐに売れてしまうので、マネキン人形はいつも服を着ているわけではなく、布を巻き付ける状態でした。裁断して縫っているところですでに売約済みになってしまうような時代でしたが、とてもやりがいのある、おもしろい仕事だなあと思ったわけです。

その頃の新宿は今のように立派なビルが建ち並んでいる街ではありませんでしたが、夜になると、アーティストや映画関係者、売り出し中の作家などが新宿にやってきて、がやがや一杯飲む、そういう時代でした。

酔眼朦朧というのでしょうか、一杯飲んで二階を見上げるので、そこにいい女が立っているように見えたようです。ある日、映画の美術監督さんと衣装部のスタッフが狭い階段をトコトコと上がってきました。そして私に映画のコスチュームデザインの仕事をやらないかと。日活という映画会社で、これから文芸作品など、ファッショナブルな映画を作りたいので、ファッションデザイナーが必要だ、ということでした。私は若かったものですからお引き受けして、それが映画の道に入る第一歩になりました。

当時の日本は今ほど洋式化されていませんでした。生活はまだまだ日本式で、家に帰ると靴を脱いで上がり、こたつで暖を取ったりしていました。街もそれほど舗装されていませんでしたね。普通の人たちは洋服を着ていたのですが、その洋服と実際の暮らしぶりがどうも一致しないという印象をもって

いました。ところが、映画の仕事というのは見る人にロマンを与える仕事で、やっていて、とてもおもしろかったです。石原裕次郎さんや浅丘ルリ子さん、また、当時十六歳ぐらいで、若くてきれいな吉永小百合さんにはがんばってくださいと応援しました。「がんばってやろう！」という意志のある女性や、今では第一線で活躍していらっしゃる男性の俳優さんたちが、がんばっていた時代です。やがて日活だけでなく、松竹や東映、東宝などの仕事も来るようになり、本当に忙しい日々を過ごしておりました。しかし、そのうちにテレビが台頭して、映画産業は斜陽になりました。

パリ

映画のコスチュームで忙しくしていた頃には、私は銀座にもお店をもっていました。銀座と新宿を行ったり来たりしていたのですが、一般の方々が着る服も作るようになっていました。ファッションというのは人間のからだに一番近い文化です。映画のコスチュームなどでは、身につける服で人物の性格を表現することが重視されますが、普通の方が着るときには「服とは、からだに一番近い文化だ」と定義づけておりました。

ところが、その時代、私たちの実際の生活では暖房がない、歩く道は舗装されてないわけです。その生活にあわせて服を作るわけですから、映画の仕事をしていた頃のような楽しさがありません。「もうやめてしまいたい」とひどく落ち込んでおりました。そうしたところ、その私の落ち込みぶりを見ていた友人たちが「あなたはがんばってきたのだから、やめるなんて言わないで、ファッションの本場・パ

リに行ってきたらどう?」と勧めてくれました。

そして一九六一年、私は初めてパリを訪れました。そのときは新聞社からコレクションの原稿を書かないかと依頼を受けまして、仕事も携えてパリに行ったわけです。飛行機を降りて、街に入るまでに、まずびっくりしました。とにかく街が美しいのです。「こういう街のなかに人間が住んでいるんだ」と驚きました。街の中に入ってきますと、人間が美しい。着ているものなんてそれほど目立ちません。歩いている老若男女がとても魅力的でした。きれいです。「ああ、これだ。服は人間が着るものなんだ」と感じながら、パリで一カ月過ごしました。

ちょうど一月で、寒いときでした。その頃はオートクチュールが最も盛んなときでして、ジバンシーさんやピエール・カルダンさんはまだまだ新人でした。ココ・シャネルも仕事をしておりました。いろいろなデザイナーのショーを見に行ったのですが、当時はそれぞれのメゾン（サロン）でショーをやっていました。「なんて美しい」と思いました。女性をまるで生け花のように飾り立てる。ただ、不思議だなと思ったのはデザイナーがみんな男性だったことです。

最後にココ・シャネルがショーに呼んでくれましたので、カンボン通りにあるシャネルのメゾンに行きました。シャネルのショーを見ておりまして、「これはなんだか違う」と思いました。まずモデルがそれほど若くはありません。そして、着ている人と着ているものがとても一致していて、どんなデザインだったかはあまり感じないのです。とにかく、自然で美しい。

その後、フランスの方々にお聞きしたのですが、当時のフランス社会では女がオートクチュールの高くてきれいな服を身につけるということは、その女性のパートナーがリッチであるということなのです

ね。たとえば、ギリシャの船舶王がマリア・カラスにクリスチャン・ディオールのすごいオートクチュールの服を着せる。あるいは、とても成功したビジネスマンがプレステージ（名声）のために奥さんにオートクチュールを着せる。そういうことでした。つまり、男性が見て「いい女だな」と思うような服を作るのは、女よりも男のほうが上手なわけですね。

ところが、ココ・シャネルという人は、女性をきついコルセットや大きなペチコートから解放することをテーマにしていた人ですから、シャネルの作った服は着心地がいいと言われていました。さらに若いことが美しさのすべてではなく、年を重ねた女性の内面から来る美しさを重視している人でした。とても感動しました。せっかくパリに来たのだし、これまで人が着る服ばかりを作っていた。もともと自分が着る服を作りたいと思って、この仕事を始めたのだから、お客になってシャネルスーツを作ろうと決心しました。

シャネルスーツは当時の日本でもかなりコピーが出回っていましたし、アメリカなどでも、あのカーディガンスタイルのシャネルスーツはひとつの型になっておりました。私はコレクションを見た三日後にシャネルのメゾンに行って、スーツを頼みました。東京の亭主に「カネオクレ」と電報を打ちました。あとですごく怒られましたが、とにかくお金を送ってくれました。

シャネルスーツ

三回ほど仮縫いをしてシャネルスーツを作りました。値段は高いのですが、感心したことがたくさん

ありました。最初に訪ねていったときに、「あなたのその長くて黒い、まっすぐな髪は何てきれいなの！」と言われたことです。日本人の髪はみんな黒くてまっすぐですよね。私は映画で裏方なんかをしていたものですから、忙しくて髪の毛にパーマネントもかけずに伸ばしっぱなし。長い髪をサザエのようにぐるぐると丸めて、ピンでとめていただけでした。「どうして？」と周囲を見渡したところ、フランスの人たちの髪の毛は黒くはありません。そしてカールしている。違いが大事なのです。

これは後日のことですが、フランスで仕事をするようになって、『Vogue』の記者が取材に来ました。コーヒーを飲みながら、ふと「西洋ではどんな女性が理想的な美しい女性なの？」とたずねてみました。「髪の毛はブロンドね。目はブルーがいいわ」と。確かにフランス人形は目が青くて髪の毛はブロンドですよね。そして彼女は続けて「あごはとがっているほうがいい、ほお骨はちょっとはっていて。でも高すぎる鼻はダメよ」と。私は鼻が高いほうがいいと思っていましたが……。

ついでに聞いてみました。「日本人についてどう思う？」。彼女が最初に言ったのは「やっぱりまっすぐで黒い髪はすばらしいわね。あれは食べ物のせいかしら？」ということでした。ひと頃、日本では男性も女性も茶髪にすることが流行っていましたが、当時私は本当にもったいないなと思っておりました。最近では黒髪を大事にする方も増えてきて、うれしいですね。それから彼女は「日本人はみんな肌がきれい。これも食べ物のせいかしら？」と言いました。

もう一点、彼女が付け加えましたのは「日本人はとても優しい笑顔を見せるけれど、歯並びがちょっと問題じゃない？」と。きれいな人でも、笑ったりすると、意外に歯並びが悪い人もいます。西洋人から見ると、〝歯〟はとても重要なチャームポイントなのですね。確かに、西洋では子どもの頃からお金

をかけて歯の矯正をしています。

さて、それから仮縫いにまいりました。シャネルスーツはスリーピースですから、最初にブラウスとスカートを仮縫いしました。当時の東京では、普通、スカートは縫うところが少ないし、ブラウスも簡単だからと、若い人に。ところが、シャネルではアトリエが二つあって、ひとつは女のチーフがいるアトリエで、手の先を使って繊細な仕事をするところ、もうひとつは男性がチーフです。ブラウスとスカートは女性のアトリエのチーフが出てきて仮縫いをしてくれるわけです。彼女は「スカートとブラウスはからだに一番近いところだから、着心地がよくないと」と。スカートとブラウスは簡単なものと処理しておりましたから、目から鱗が落ちる気持ちで聞きました。

上着の仮縫いになりますと、男性のチーフがジャケットを持って現れました。彼は「このシャネルのジャケットは、シャネルが男性の上着からヒントを得たもので、マダムが女性に着せたいと思ってデザインしたもの。着心地がよくて、便利です」と。「だから、大事なのは肩幅が合っていることです。あとはその人の身長や好みに合わせて丈を決めればいい、とマダムは言っております」。

つまり「からだに近いから着心地が大事」「男性の背広からヒントを得たジャケットは肩幅とアームホールが合っていることが大事」ということ。西洋の歴史の中で培われてきたものなのだと思いました。

そうしているうちに疲れもだんだんといやされて、また「やろう！」という気持ちが戻ってきました。パリからドイツに旅行したときには、ゾーリンゲンのハサミなどをたくさん買い込んだりして、東京に帰ってきたわけです。そのときに思ったのは、「パリのような伝統のある、シックなことがよくわかっているところはすばらしい。しかし日本の戦後にモダナイズという新しいことを持ち込んでくれたアメ

リカはどんなところか」と。そこで、パリの気分がまだ自分の中に残っているうちに、ニューヨークに行ってみることにしました。

初めてのニューヨーク

その年の夏休みにニューヨークに行きました。ニューヨークに行ってみると、パリと違って気楽でした。しかし、私たちはアメリカのことをよく知っているのに、アメリカの人たちは日本、韓国、中国、タイとそのあたりの地域は一緒になってしまって「東洋」と認識していました。でも、みんな感じがよくて、どこに行っても「遠い国からよく来たね」と歓迎してくれました。

当時はケネディさんが大統領でしたから、ジャクリーヌ・ケネディさんがファーストレディ。デパートに行きますと、マネキン人形がみんなジャクリーヌさんのような顔やヘアスタイルでした。そして、アメリカの友人が「ジャクリーヌ・ケネディさんの主任デザイナーに紹介してあげるよ」と言ってくれたのです。「ファーストレディのデザイナーに、東京からひょいと来た者が会えるなんて……大丈夫？」と心配でしたが、お会いしたそのデザイナー、カッシーニさんは男性でしたが、「よく来たね」という感じで、自分でコーヒーを入れてくれるんです。これにはびっくりしました。もっとびっくりしたのは、「ちょうどクルーズコレクションが上がってきたところなんだ。これからカリフォルニアに送るので、チェックしようと思っていたんだ。一緒に見ないか」と言ってくれたことです。クルーズコレクションというのは、寒い冬、クリスマスなどにお金持ちがパームビーチなどの保養地で着るためのぜいたくな

コレクションです。とても気さくで、パリに行ったときよりは気分が軽やかになりました。

別の友だちがデパートに行こうということで、五番街にあるサックス・フィフスアベニューに連れて行ってくれました。地下から見ていったところ、地下には安くて質の良くないものを置いてある。そして上に行くほど高級品になり、最上階にはジバンシーなどパリやヨーロッパの有名デザイナーの名前がついたものを売っていました。「メイド・イン・ジャパン」のものは地下で売られていたのです。「あぁ、日本製は安くて粗悪というイメージなんだ」と本当にショックを受けました。恥ずかしいというか、情けないというか。「私たちには西洋とは違った文化がある、それは独特の感性に裏打ちされた、すてきなものなのに……」と強く感じました。

別の機会に、また誘われて、プッチーニのオペラ『マダム・バタフライ』を観に行きました。竜宮城の乙姫様のような女性が出てきて、和服だか中国服だかわからないものを身につけて、下駄を履いて畳の上を歩く。「ずいぶんだわ。失礼しちゃう」と腹が立ってきましたが、そんな経験をしながらニューヨークでの日々を過ごしました。

そのうち、日本からデザイナーが来ているということが『ニューヨークタイムス』のファッション担当編集者の耳に入ったらしく、「おもしろそうじゃないか」と取材の話が来ました。アメリカ人にとっては「おもしろい」ということがとても重要なのですね。インタビューが始まったところ、まったく話がかみ合わない。私の英語がダメだからかなと思って、いやな雰囲気になっていたところ、最後になって原因がわかりました。彼女は私をキモノのデザイナーだと思っていたのです。日本に洋服というものがあるなんて、思ってもみなかったのですね。戦争に勝って、あれだけたくさんの兵隊さんたちが日本

に来ているのに。一般には日本人はみんなキモノを着ていると思っていたらしいのです。最後は笑ってすみましたけれど、私は日本への帰途、「アメリカでやろう」と決意したのです。

ニューヨークコレクション

帰国後の二年間は、ものすごく勉強しました。アメリカで長く仕事をしている商社の方が「アメリカというところはとにかく上りのエスカレータに乗れば、すぐに有名になる。でも下りのエスカレータに乗ったら、どんなにがんばっても上には上がれない。だからそんなに危ないことはしないほうがいいよ。日本でうまくやっているのだから」と言われました。二年間いろいろと学びました。

まず日本の感性や伝統を勉強するうちに、日本の和服の歴史はすばらしいということです。「季節を着る」というのでしょうか、自然とのつながりが強くて、それは材質や柄にも反映しています。けれども、和服の反物は幅が三十数センチしかありません。これでは、体格の異なる人たちが集まっているアメリカで使うことは難しい。では洋服の生地をと思いましたら、日本で出回っている布地はほとんど外国のコピーでした。布幅が広いちりめんを、白浜で見つけました。座布団にするための鬼しぼちりめんです。七十センチまであって、その白い布を買い込んで、それにプリントして、洋服を作りました。そして、一九六五年の一月にニューヨークのホテル・デルモニコで、第一回の海外コレクションを発表したわけです。

そのときにとても感激したことはモデルさんたちの協力です。当時、日本のモデルたちは、デザイナー

よりも早くパリで活躍していました。ピエール・カルダンのモデルをしていた松本弘子さんや、イブ・サンローランでモデルをしていた高島さんをはじめ、クリスチャン・ディオールにも日本人のモデルがいました。彼女たちが「それ！」とばかりに、ニューヨークへ来てくれた。これに私はとても感激しました。もちろんアメリカのモデルたちと一緒に。

アメリカは大きな国ですから、一年に一回プレスを呼んで、ニューヨークのデザイナーの作品を見せるプレスウィークをやっておりました。そこではひとりだけ外国人のデザイナーを毎年招くことになっておりまして、この年は私を呼んでくださったわけです。私はとにかく日本の生地を使い、私がデザインし、日本の職人さんたちと一生懸命作ったコレクションを飛行機に乗せて、ニューヨークに送り込みました。

ショーでは最初のうちは静かでした。そのうちモデルたちが楽屋に帰ってくると「うまくいってるわよ」と報告してくれるようになり、やがてショーが終わったら、会場から裏にどっと人が入ってきました。この中に、ダラスの有名デパート、ニーマン・マーカスのご主人ミスター・マーカスがいたのです。私がお招きしたわけではないので、私は全然知りませんでした。彼は東洋のアートが好きで、特に中国の美術品を集めているということでしたが、「おもしろかった」と言ってくれました。「おもしろかったから、ワイフの誕生日のためにオーダーしたい」と、スーツとイブニングドレスとカクテルドレスを一着ずつ選んでくれました。でも「うちの店にはメイド・イン・ジャパンのものは何も置いてない。メイド・イン・ジャパンのものは安くて悪いという定評だから」と言われて、「やっぱりこれなんだ」とショックを受けました。

奥さんへのプレゼントと言われたその三着の服は、実はサンプルだったようで、そこから私のアメリカでの仕事が始まったわけです。その後、シーズンごとにニーマン・マーカスからはバイヤーが来て、オーダーをもらうようになりました。そのオーダーの中に、カリフォルニアではどこ、ニューヨークではどこというように、それぞれ私の作品を扱ってくれる高級店があるわけですけれど、カリフォルニアからいつも来るオーダーのなかにほっそりした特別サイズのオーダーがありました。それは、後になってわかったのですが、レーガン大統領夫人からのものでした。彼女が東京にみえたときに私のところに訪ねてきてくださって、「東京で買ったらアメリカよりも安いでしょう?」と言われて、びっくりしました。そのときに初めて、夫人がシーズンごとに私の服を買って下さっているということがわかったわけです。

また、『Vogue』に掲載された写真だったと思いますが、グレース・ケリーさんが私の服を着てくださっているのを見たこともあります。デパートでオーダーをとっていますから、どなたが着てくださっているのかはわからないのです。

パリに進出

やがてベトナム戦争が激しくなってきました。若い人たちは戦争に行きたくない。反戦運動として、ジーンズを破いて、手描きのペイントをほどこしたTシャツなどを着ていたりしていました。そのときに私は思いました。「若い人たちがこんなに無意味な戦争に行きたくないという時代に、私はきれいな服を作っている、これでいいのかな」と。もちろんドレスは売れるのですが、時代とかけ離れた感じが

しました。「きれいなイブニングドレスを作ることに一体なんの意味があるのだろう」と悩んでおりました。

そう思っておりましたところに、モナコのグレース王妃から「あなたがニューヨークで見せている、色のきれいなコレクションをモナコに持ってこない？　新しいホテルのオープニングにチャリティーショーをやりたいのだけれど」というお招きをいただきました。当時は、日本の映画衣装の仕事がおしまいになったときと同じような気分になっていたものですから、チャンスかなと思いました。気分を変えて、「光と影で作るかたち」を創造してみたいと思うようになっていたものですから、黒い服を数着加えてモナコに行きました。ショーはうまくいきました。

帰りにパリでも見せたらとすすめられて、ホテルでコレクションをしました。そうしたところ、「パリにいらっしゃいよ」と友人たちにすすめられ、「ここで階段を一段上りましょう」と、思いたちました。

また一年ぐらい勉強しました。ニューヨークでは〝East meets West〟ということがテーマでした。一流店のバイヤーに「ニューヨークというところは〝新しい〟、〝珍しい〟、そして〝色がきれい〟ということが大事です」と言われ、それを追究していました。でも、これからはフランスのデザイナーがやっているような〝かたち〟を追究したい、そしてパリでやるからには、もう長い間やってきたのだから、オートクチュールをやりたいと思っておりました。フランスのオートクチュールのメンバーになりたいと思いました。パリのオートクチュールはフランス政府がサポートしておりまして、東洋人をオートクチュールの正式メンバーにすることは珍しくて、一シーズンはウェイティングリストに載せられました。その後、一九七七年、オートクチュールの正式会員になったわけです。東洋人で初めてで、新聞や雑誌など

がいろいろと取り上げてくれまして、よい滑り出しでした。

自分のルーツ

それから二年ぐらいたって、ある有名な服飾評論家が「マダム・モリはフランス人よりもフランス的な服を作る」と新聞の批評に書きました。私はフランスのデザイナーのように光と影で〝かたち〟を作るような仕事をしたいと思っていたわけですから、最初はほめられたのかと思いました。でも、そうではないのです。「あなたは、どこから来たの?」と問われたのです。

パリには、世界中から力のある人たちが吸い寄せられるように集まってきて、そしてそこで花を咲かせるところです。もちろんダメになる人もいますが……。パリで重要なことは、他の人たちとは違う、〝自分のルーツ〟なんです。私はそれをアメリカでずっと追究してきました。それを変えたいという気持ちもあったのです。

それから少し悩み、考えました。「私はやはり日本人だ。日本にはすばらしい感性とすばらしい伝統がある。ニューヨークでやったように〝これでもか、これでもか〟ということではなくて、〝香り〟のような日本らしさを漂わせること」と思い始めました。

ですから、「自分はどこから来たか」。そのルーツというものをしっかりと見すえなくてはいけないのです。ルーツがしっかりしていない人間というのは尊敬されないということです。

みなさん若い人たちはちょっと勉強するとすぐに外国に行きたがるということがありますが、やはり

自分のルーツを大事にしてほしい。若いうちに日本の伝統などをよく勉強して、自分のなかに取り込んでほしいと思います。

今、インドや中国といった国もすごい勢いで伸びてきています。日本もインド、中国も同じ「東洋」と一緒に見られますが、実は違いますよね。パリでも今では東洋人がとてもたくさんいます。ルイ・ヴィトンの前にもかつて日本人がたくさん並んでいましたが、今は「日本人かなあ?」と思ってよく見ると、そうではないことのほうが多いようです。日本人と同じような顔だけれど、ちょっと違う。もちろん同じ東洋人でも考え方が違います。海に囲まれているこの日本には独特の感性が育っています。みなさんがこれから地球のうえで仕事をしていくとき、この宝物である〝日本の伝統的な感性〟をしっかりもってほしい。この〝違い〟はとても貴重なものだと思います。

たとえば私が仕事をしているときには、アメリカでは「渋い」という日本語が「SHIBUI」と、そのまま英語になっておりました。日本の「渋い」という感覚とはちょっと違うのですが、日本的なものを好きな人たちは「渋い」「渋い」とよく口にしておりました。パリでは、今、「禅」という言葉が流行っています。みんな、ちょっとひねった渋いものを見ると「ZENだね」と言うのです。最初はなんのことかな?と思いましたね。

プラス感覚とマイナス感覚

私は二十七年間パリで仕事をしてきたわけですが、何人かのデザイナーがそれぞれ何着かの服を出し

て、世界のどこかで合同のファッションショーをすることがしばしばありました。自分のショーでは裏にいますが、そういうときにお客になって表から見ていますと、「フランスのデザイナーの作品と私の作品は違う」と思います。どこが違うのだろう？　と考えました。つまり、西洋のファッションは〝プラス感覚〟なんです。「ここは目立たせたいから、花をつけましょう」「ここは強調したいから刺繍を」というようなプラス感覚で、とても華やかで豪華です。

ところが、私は自分のコレクションを作るときには「これはちょっとムダだからとってしまいましょう」「こっちを目立たせたいから、これはないほうがいいわ」というように、マイナスの感覚です。だからプラス感覚の作品とマイナス感覚の作品とを一緒に並べますと、それはプラス感覚の作品のほうが豪華で、私の作品は少しさびしい。

そういうときにふと思い出すのは、勅使河原宏さんの『利休』という映画です。みなさんのなかにもご覧になった方がいらっしゃるかもしれません。勅使河原宏さんは草月流のお家元でアーティストですが、映画も名作を撮られていて、岸田今日子さんが出演なさった『砂の女』は世界的に高い評価を得ています。『利休』は私にとって本当に心に残る映画でした。こんなシーンがあります。暑い夏の早朝に、利休のところに秀吉がお茶をいただきに来ることになりました。利休は早朝の庭に出て、たくさん咲いている白い朝顔をずっとチェックしていきます。そしてそのなかの一輪だけを切り取って、後の花はすべて切り落とし、捨ててしまい、その一輪を床の間に活けて、そこでお茶を点て、秀吉に振る舞います。

これを見たときに、私は「ああ、これは日本の感覚だ」と思いましたね。「しかし、これは一対一の場面では確かにピュアできれいだけれど、西洋のように大勢が集まる華やかなパーティでは、やはりフ

ランスの感覚が重要なんじゃないかな」と。それからはプラスとマイナスのそれぞれの感覚を使い分けて、作品を創っています。

日本の感覚は本当にすばらしいと思います。みなさんも、日本の伝統や感覚に積極的に関心をもっていただきたいと思います。

今日はいろいろなお話をいたしましたが、人間にとって重要なのはそれぞれのライフスタイルで、まず基本は、自分らしく、美しく歩くこと。みなさん、どうぞ背すじをぴんと伸ばして歩いて下さい。身体的にも、精神的にも美しく、気分が引き締まると思います。

これからみなさんの活躍の場は、国境の低くなった地球のうえです。〝美しく歩く日本人〟をアピールしてほしいと願っています。

質疑応答

Q1　学生A（経済学部二年生）　森さんは、パリのオートクチュールの会員になられたり、いろいろな国でコレクションをなさったりと、常に新しいことに挑戦していらっしゃいましたが、そのなかでたいへんなこともたくさんあったと思います。そんなときにデザイナーとしての森さんの原動力となって

きたものは何だったのでしょうか。

A　私は〝洋服〟という、西洋の暮らしの伝統の中で育ってきたもの作りを職業にしたわけです。ですから未知のこともたくさんあったわけですが、それを追究することが本当におもしろかった。しかも自分の手で作るわけですね。作っているうちに、だんだん「こうしたら、もっといいんじゃないかな」というようにさらなるアイデアが出てきます。今ではコンピューターがありますが、私がオートクチュールをスタートしたころは本当に自分の頭で考えて、手を使ってという作業の繰り返しでした。パリで初めてコレクションをしたころなどは、ミシンをどれだけ使わないかということが誇りだったのです。そういう手で作るということに楽しみがあったし、それが人間の生活に密着しているものだったので、作ったものに対する好き嫌いの反応もすぐに出てきていました。ファッションとは、一人ひとりのデザイナーが時代の流れを先取りして、「人々の生活は、おそらくこうなるのではないだろうか」「どうあるべきか」など感じたものを用意して、着ていただくという仕事です。そういったところがおもしろかったし、勉強になったのではないかと思います。

Q2　学生B（経済学部四年生）　森さんは、自分が身につけるものと社会的立場、年収、職業、年齢などとの関係についてどうお考えでしょうか？　たとえば今、若い人たちのほとんどがヴィトンのバッグをもっています。ブランドが好きな人はそれにこだわればいいのか、それとも自分に見合ったものを身につけるべきなのでしょうか？

A　日本人ってとてもブランドが好きですよね？　流行のブランドを着たり、持ったり、履いたりして

いると、その時代に自分が参加しているという実感を得られるのかもしれません。でも、もっと大切なことは〝自分らしさ〟だと思うのです。若いころにいろいろやってみるのは悪くないと思います。やってみればわかりますからね。

今の時代は、先ほどお話ししたベトナム戦争のころと同じように、イラク戦争でたくさんの人が亡くなっていたり、いろいろな問題が世界各地で起こっています。社会的な状況が似ているだけでなく、ファッションにしてもベトナム戦争のころと同じ感覚だなと思うところがたくさんあります。たとえばジーンズを破ったり、ローウェストではいたり。当時はヒップハンガーと言っていましたが、今はそれよりも下ですよね。また、胸も強調したりと、そこまで見せなくてもいいのではないかというような着こなしをしたりしています。またミニスカートも流行し始めました。だんだん服の分量が少なくなってきている。そんななかで、服をどんなふうに着ていいのかわからなくなってしまっている人がたくさんいるのではないでしょうか。だから、高価なブランドバッグに飛びついたり、ちょっと危ないなと思うような高いハイヒールを履いたりというように、服ではなく装飾品で自分を表現しているのではないかと思います。

でも、流行のものを身につけると、今の時代に参加していると思うのはおかしい。大切なことは自分です。主役は自分です。スタイリストは自分自身です。自分のことを一番よく知っているのは自分自身でしょう？　かといって、流行を無視していいというわけではないと思います。今何が流行っているのかということはよく認識しておいたほうがいい。ただしその流行を全部手に入れるのではなくて、自分らしくアクセントに。気分が新鮮になるはずです。だから、自分の好みやライフスタイル、人との違い

を表現しながら、さらに時代を認識した装いをしていけばいいと思います。

Q3　学生C（商学部二年生） 僕は、将来ファッション関係の仕事に就いたら、京都でキモノのコレクションをしたいという夢を持っていまして、キモノというものを世界に対してもっと発信していってもいいのではないかと思っているのですが、森さんはいかがお考えですか？

A　フランスから政府の高官などが日本にいらっしゃって、ランチなどでお会いして、よくご夫人から「せっかく日本に来たのだから、日本のキモノが買いたい。古着のキモノでいいのだけれど」と言われます。というのは、「古着＝いいものが安い」という認識です。忙しいスケジュールを縫って、原宿などの古着屋さんで、彼女たちが選ぶのは簡単に着ることができる羽織なのです。後にパリのパーティで出会ったら、黒いシンプルな服にその羽織を羽織っていました。そして彼女がみんなに、「この裏を見てちょうだい。裏に絵が描いてあるのよ。日本人ってすごいわね。見えないところにこんなにきれいな絵をあしらうなんて……」。私はほほえましく思いますが、そんなふうに日本のキモノに目を向ける方は増えています。

サイズがなくて、布地をからだに巻き付けて着るということは文化ですよね。洋服のようにからだの寸法に合わせて布を裁断して、仕立てて、からだの線を出すのではなく、どんなサイズの人でも着られてしまうというのはすごい。そのかわり着るための技術や、自分自身を知っていること。

あなたのような若い方が和服に興味をお持ちになるのは、今や私たちが日常的に洋服を着ているからですよね。だからすばらしいと思います。

Q4　学生D（法学部一年生）　森さんは女性として社会の第一線で活躍されてきた方ですが、働く女性についてお考えがあればお聞かせください。

A　最近では仕事をする優秀な女性がとてもたくさんいます。みんな力がありますよね。仕事をすることは大切だと思いますが、仕事をすることがあまりに重要になりすぎてしまって、私生活がかなり犠牲になっている人たちも少なくないのではと思います。私には子どもが二人います。子どもを育てながら、この仕事をしてきましたけれど、家庭というのはやはり温かい。仕事をしていますと、いいことやうれしいことばかりではなくて、嫌なことや傷つけられることもたくさんあります。そういったときに家に帰るのは、鳥が巣に帰っていくようなものです。嬉しいことがあったときには家のなかで自慢する。嫌なことがあったときにはちょっとこぼす。それで消えてしまうのですね。ですから、翌日家を出るときにはまたいい顔になって出ることができます。

仕事をする、仕事ができる女の人たちにお願いしたいことは、できるだけ家庭をもってほしいということです。いい人を見つけて、結婚してほしいと思います。それも年を取ってからではなく、若いうちに。そして子どもを産んで、子どもを育てながら、仕事をやっていただきたいと思います。今、少子化が問題になっていますが、いろいろなところで働くお母さんを援助しようという風潮も出てきています。確かに子どもを持って仕事をしていくのは物理的にはたいへんですが、人間としては幸せな道だと思います。

その上、女は子どもを産んだときが一番きれいなんですよ。私はたくさんの人を見てきましたが、こ

れは生理的な問題もあるのかもしれませんが、やっぱり充実しているのでしょうね。人間の生活のうえで、パートナーをもって、子どもをもって、成熟していくというのが最も自然な道なのではないかと思います。

Q5　学生E（法学部一年生）　地球のうえで同じように働く女性を見てきた森さんから見て、早歩きで進む女性とゆっくり歩く女性ではどちらが魅力的だと思われますか？

A　そうですね。そんなに急ぐことはないんじゃないですか？　でも、ゆっくり歩いても、早く歩いても、自分が大事ですよね。自分を磨かなければ、早く歩いても、ゆっくり歩いても、あまり成功しないのではないかと思います。また歩く速度にかかわらず、一緒に歩めるパートナーがいたほうがいいのではないでしょうか。この頃の男の人はよく手助けしてくれるようになりましたから、昔ほど働く女性だからといってたいへんではないかもしれません。

Q6　学生F（理工学部三年生）　ファッションデザイナーという職業を通じて、社会におけるご自身の役割をどのようにとらえていらっしゃいますか？

A　ひとつ例を挙げましょう。一年半ほど前に、文化庁に「森英恵ファッション文化財団」を作っていただきました。ここでしている仕事には二つの大きなテーマを掲げております。ひとつは、私が長年手がけてきたオートクチュールの作品を展覧すること。それは職人たちが手でつくった作品―今ではもうできない貴重なものもあります。そうした人間の〝手で創る〟ということの素晴らしさを見ていただき

たい。指から来る刺激が人間の思考を豊かにすると聞いたことがありますが、「ものを作る楽しみ」を広めていきたいと思っています。

もうひとつは、これからの地球を背負っていく若い人たちに何かチャンスを作ってあげたいということです。驚きますのは、日本の大学を中退してニューヨークに渡り、そこで勉強して、またヨーロッパに渡って勉強して、日本に帰ってきたものの、日本の中で場がなくて、またヨーロッパに戻ろうかと悩んでいる人たちもいます。すごくできる人たちなのです。私たちの若いころは苦労しましたが、今の若い人たちは経験が少なくても、ものすごくいい仕事ができる。話をしていても、とても刺激になります。そういう方が作品を発表できる場所や機会を作っていきたいと思っております。

Q7　学生G（理工学部二年生）　森さんはご自身のこれまでを振り返って、ファッションデザイナーとしての成功の理由はなんだと思われますか？

A　行き詰まったこともちろん何回もありますよ。でもそのたびに、「こうしようか」という努力はしてまいりましたし、ものを作る楽しみや興奮ということも原動力になってきたと思います。ただそれだけではなく、やはりパートナーや一緒に仕事をしてきた人たちに肩を押されたということが大きかったと思います。人間はひとりでは孤独になってしまいますし、考え方も独特になってしまいがちです。常にパートナーや仲間たちがいてくれたことがよかったのだと思います。子どもの教育もしなければなりませんから、その教育の場を訪ねたり、研究したりしていると、それが親にとってまたとてもいい勉強になるのです。人間としての視野が広くなったと思っています。

Q8　学生H（文学部四年生）　お話の中で「着心地のよさ」という言葉が何度か登場しましたが、森さんにとって「着心地のよい服」とはどんなデザインのものなのでしょうか？

A　やはり着こなしが無理なくできる、というのでしょうか、もちろんサイズが合っている必要はあると思いますが、常に自分が自分でいられるような服だと思います。以前はＴＰＯが大事だと言われましたが、最近では「こういうところにもジーンズをはいてきているのね！」というような人たちもいるわけです。そしてそれがとてもしゃれているという考え方もあります。でもそうではなくて、ＴＰＯは大事だと思いますし、みんながそれを守ることによってファッションは進んでいくのではないかと思います。そういった意味で、「着心地のよい服」とは、あまり無理しなくて着ることができるもの、自然な気持ちで自分らしさを表現できるもの、こういったものをＴＰＯに応じて着ていただけたらと思います。